

論文

日本の『蟹工船』ブームと中国の国語教科書からの『包身工』の削除について

張 新 力

要 旨

『蟹工船』が発表された翌年の1930年、中国左翼作家の夏衍がそれを雑誌『拓荒者』第一号に紹介した。同年四月『蟹工船』中国語版が出版され、小林多喜二の名前と『蟹工船』が中国で知れ渡るようになった。

1936年、夏衍が上海の日系紡績工場で働く女工の生活を紹介するルポルタージュ『包身工』（中国版『野麦峠』に譬えられる）を発表した。夏衍が『包身工』を書く際、『蟹工船』を参考したかどうかについては調べようがないが、書き方が酷似していることは否めない。

同じプロレタリア文学として『蟹工船』は日本文学史に名を残し、『包身工』は新中国になってから高校の国語教科書に君臨し、その地位は揺るぎないものになった。しかし、『蟹工船』が発表されて75年に当たる今年に再びブレイクしたのに対して、『包身工』は国語の教科書からひっそりと姿を消してしまった。

小論は両作品の内容を比較し、ブームと削除の社会背景を分析する。

キーワード：蟹工船、包身工、夏衍、格差、貧困、現代の包身工

はじめに

1930年代、中国では魯迅をはじめとする日本留学経験のある左翼作家が活躍していた。のちに新中国の文化相になった夏衍もその一人であって、彼は小林多喜二が『蟹工船』を発表した翌年の1930年に「若沁」というペンネームで『拓荒者』第一号に「『蟹工船』について」を発表し、「『蟹工船』はプロレタリア文学の傑作」と評価した。同年4月大江書舗は潘念之氏が翻訳した『蟹工船』を出版した。この中国語版『蟹工船』の出版にあたって、小林多喜二はわざわざ序を書き添えた。その後、すぐに国民党当局に封殺されたが、共産党政権になってから、『蟹工船』は資本主義国家の階級対立、資本家の限りない利益追求の本性と非人道的な搾取を知る本として読みつづけられてきた。

『蟹工船』を一早く中国に紹介した夏衍が、1936年に上海の日系紡績工場で働く女工の生活を描くルポルタージュ『包身工』を発表した。夏衍がこの作品を完成した過程で『蟹工船』を意識したかどうかは調べようがないものの、書き出しや女工の生活環境、職場での待遇及び末尾の書き方など、『蟹工船』に酷似しているから、読者に両者の関連を連想させる。

両者の相似点はともあれ、戦後の長い歳月のなかで、『蟹工船』は読まれる度合いよりプロレタリア文学の代表作として日本文学史に占めるウエートのほうが重い。いっぽう、『包身工』は五十年代から高校の国語の教科書に登場して以来、帝国主義資本家と中国の買弁勢力がいかに労働者から搾取していたかを紹介する教材として代々使用され、その地位は揺るぎないものであった。

しかし、2008年日本では『蟹工船』が再びブームになったのに対して、中国では『包身工』が高校の教科書から消えてしまった。それについて、賛否両論の反響が大きかった。文学作品は現実を映し出しているがゆえ読まれるのだが、成熟した資本主義国家の日本に『蟹工船』ブームが起これ、そして、社会主義の体制を堅持しながら市場経済を発展させているうち、資本主義の色彩がだんだん濃くなってきた中国では『包身工』が教科書から削除された。二つの出来事の背後に複雑な社会的経済的背景があると思い、それについて探ってみたい。

一、『蟹工船』と『包身工』の相違点

両者の相違を比較する前に、中国語における「包」という文字の意味を説明しておく必要がある。「包」には①包む、くるむ。②包み。③袋、入れ物。④囲む、取り巻く。⑤含む。⑥引き受ける、請負う。⑦保証する、請け合う。⑧借り切る、など多様な意味を持つ。「包

身工』の中の「包」は⑥～⑧の三つの意味合いを持ち合わせているもので、よって「包身工」の複雑な身分を垣間見ることができる。

上海の紡績工場に労働者を仲介するつてを持つ田舎出身の上海人が、故郷で貧しい農家の子女、主に十四、五才の女の子を集め、その親に上海で面倒を見ることを保証し、大洋(当時の貨幣単位)二十元を払って、その子を三年間預かる契約をする。この田舎出身の上海人を「帯工」と言い、「帯工」に三年間身売りした農家の子女を「包身工」という。「帯工」は「包身工」に食・住を提供し、「包身工」の稼ぎは「帯工」の懐に入る。言い換えれば、「包身工」は「帯工」のための金を稼ぐ道具である。

『包身工』と『蟹工船』の相違点を見るために、以下六項目に絞って比較していく。

1 人物:『包身工』は瘦せこけた「^{ルーチエイバン}葦柴棒」、工場で虐待を受けた「^{ショウフニツ}小福子」、それに「名前の思い出せない」の三人を例に挙げ、貧困生活と過酷な労働を紹介している。それに対して、『蟹工船』に描かれた労働者は農家の二・三男坊のほかに、都市の失業者と炭鉱事故の生存者つまり都市の最底辺に生きていた男達である。「学生あがり」、「吃り」、「坑夫」、「水夫」、「火夫」、「古い漁夫」、「若い漁夫」など職業と特徴で呼び名をつけ、彼らの会話を通して恐慌下の国民生活の窮状を紹介している。このような登場人物の多様性により、『蟹工船』の展開は『包身工』より紆余曲折が大である。

2 生活環境:『包身工』も『蟹工船』も主人公の劣悪な生活環境を描くのに筆を惜しまなかった。包身工は「帯工」夫婦がかわりに借りてきた部屋を宿にし、幅7尺(1尺:0.3333メートル)、長さ12尺の狭い部屋に十六、七人が雑魚寝していて、湿気の強い部屋に汗と糞の臭いが溢れている。起こされた際、「人の靴を履き違えたり、人の体を踏んだり、人の頭から1尺も離れていないところのおまるで小便をしたりする」、「年頃の女の子が恥ずかしく感じる感覚も彼女たちのところでは鈍くなったようで、ズボンを下げて半裸のままドアを開けておまるを争う。体の向きをちょっと変えるだけで公然と男の前で着替える」、「溢れんばかりに糞尿の入ったおまるを二人がかりで天秤棒を担いで運び、人すれすれの所を通って行く」などの描写は『蟹工船』にある「蛆虫」のように豚小屋そっくりの、吐き気がするような臭いの満ちている「糞壺」を連想させる。

きつい労働に粗末な食事は両者が共通している。「包身工」は一日「二粥一飯」、朝晩は粥で、昼食にだけ飯が出る。うるち米にお焦げ、くず米とおからを混ぜて作った粥が朝晩二回、それも一人一杯きりでおかわりができない。粥にはおかずはつかない。八百屋で拾ってきた菜っ葉の塩漬けが出れば御馳走となる。粗末な食事に12時間の重労働、1/3の人が体を壊して契約の3年間を満たせず離れていく。

蟹の缶詰を作る蟹工たちの食事は蟹の「か」の字さえも見当たらない。パサパサの飯、塩引き、汁で、時化の日には汁さえ出ない。しかし、「飯を食うことには、皆囚人のような執

念を持っていた。……ハラハラした熱い飯を頬張ると、舌の上でせわしく、あちこちへやっ
た。『初めて』熱いものを鼻先に持ってきたために水漬がしきりなしに下がって、ひよっ
として飯の中に落ちそうになった」という描写から、食事は北オホーツク海で漁をする蟹工
にとって暖を取る熱源でもあったとわかる。そして、「毎日ボロボロな飯と何時も同じ汁の
ため、学生は皆身体の工合を悪くしてしまった。……『通じ』が四日も五日もなくなっ
ていた。」

上海の横丁にある小屋と北オホーツク海の遠洋船は、狭くて汚い寝床、粗末な食事とい
う点では共通している。

3 労働条件：蟹を取り、それをすぐに缶詰にするために仕立てられた蟹工船はボロ船
であったため、蟹工は常に危険にさらされていた。寒冷な条件下で長時間きつい労働を強
いられ、傷病者が続出していた。

紡績工場で働く包身工は常に騒音、綿埃、湿気に圧迫され、健康な顔色をしている者は
一人もいない。

4 酷使：蟹工船博光号の支配者は会社から派遣された監督の浅川で、彼は自分の実績
をあげるために、僚船のSOSを無視し、蟹工の生命の安全さえも顧みず「大暴風雨」の情
報を隠して悪天候のなかで働かせ、過酷な残業を強い、病人を放置し、「焼きを入れ」、死
人に対してさえ最小限度の礼も尽くそうとしない。

包身工は「帯工」と工場の「工頭」の両方に管理されていた。十五、六才の女子の包身工
の賃金は男性労働者の1/3にも及ばないのに、男性にしかできない仕事をやらされていた。
うまく働けない者に対しては、殴打、罰金、解雇の三つの罰則が使われる。殴打以外の二
つは「帯工」に不利益を与えるから、「帯工」は時々「工頭」に賄賂を贈り、「殴打」以外
の罰則を科さないようにと頼む。

5 隷属関係：蟹工は資本家に給料で直接雇われたもので、包身工は「帯工」に身売りし、
「帯工」のために働く。

6 反抗闘争：蟹工たちは監督浅川の非人間的な搾取に身の危険を感じ、自発的にサボ
タージュに入り、大勢の蟹工の中から何人かのリーダーが現れ、ついにストライキにまで
発展していった。九人のストライキリーダーが駆逐艦に護送された後、「犠牲者を出さない
ように全部で、一緒にサボに入ることだ。……また駆逐艦が呼ばれたら、この時こそ力を
合わせて、一人も残らず、引渡されよう！そのほうがかえって助かるんだ」、「ん、もう一
回だ」、とさらなる大規模なストライキを暗示して小説は終わっている。

『包身工』には団結と反抗はない。唯一の反抗行為と思われる事件は「小福子」という女
の子が過酷な労働に耐えられず、親に迎えに来てほしいという手紙を人に頼んで書いても
らったことだった。その返事が「帯工」の手に渡り、「おまえ、おれの故郷での道を断たせ

るつもりか」と怒鳴りながら彼女に殴る、蹴るの暴行をくわえた。それは他の包身工に対してみせしめの効果もあった。包身工たちが反抗しない理由として「彼らは缶に封じこめられ、外との接触がない」からと夏衍は書いている。

はたして包身工たちは缶詰にされ、外の世界と接触はなかっただろうか。作品の中では包身工たちと同じ職場に「外頭工人」もたくさんいた。「外頭工人」とは自宅から通う上海の若い女性で、自由労働者のことである。彼女たちの中にはチャイナドレスを纏う人やパーマをかけた人がいて、包身工より清潔でおしゃれであった。何よりも彼女たちには仕事を辞める権利、工場を選ぶ権利を持っていた。彼女たちは工場で「工頭」に難儀をかけられた場合、友人や「品理」、「打相打」（トラブルを解決する手法）に頼んで「工頭」に報復することさえできる。しかし、「過度に自分を高く評価したり、不必要に他人を軽蔑したりする意識が彼女たちの心に潜んでいる」ため、包身工のことを汚い、田舎くさい、野暮つたい、言葉が通じないと思ひ、相手にしようとしなない。

夏衍は『『包身工』余話』に包身工のほとんどは江北出身者だと紹介している。「江北」は揚子江以北の江蘇省の地域を指し、この江北地域からは貧困のため、上海に出稼ぎに来る人が多い。彼らは昔から上海で最底辺の仕事に従事し、最底辺の生活を送っていたが、「過度に自分を高く評価する」上海人の間では彼らのことを「江北老」（江北の田舎者）として軽蔑する風潮が今もなお存在している。実際1925年2月の「顧正紅事件」^①の時から中国共産党はすでに上海の労働者の中で運動をはじめていたにもかかわらず、真の労働者、つまり資本家に直接雇われた都市労働者は包身工を仲間に入れようとしなかった。これは中国の労働者階級内部の特異性とでも言えるだろう。ゆえに、夏衍は文の終りに包身工には「光も熱も希望も……法律も人道もない」と嘆いている。

二、『蟹工船』ブームと現代の貧困

小説は時を映す鏡で、その中から自分の姿や考えと重なるものが見つかったとき、共感を覚える。今般の『蟹工船』ブームは、まさにフリーターや派遣社員たちが蟹工たちの境遇に共鳴して起きたものとされている

プロレタリア文化大革命のなかで育った私は教育目的に使われた「プロレタリア」の教材になんとなく抵抗感を持っていたため、プロレタリア文学として『蟹工船』が評価された時、真面目に読む気はしなかった。日本で今般の『蟹工船』ブームに居合わせたのを機に、改めて読み直した。そして、時代と社会的背景はともかく、働く動機の違いに注目した。

蟹工の仕事は「寒冷、危険、きつい、汚い」の「4K」で概括できるだろう。しかし、そんな仕事でも、彼らにとっては糊口をしのぐ道であって、そのボロ船に乗らなければ他に

活路が見つからなかった。つまり、生存のために蟹工にならざるを得なかった。

今日のフリーターが就職できなかった理由は長く続いた不景気にあると分析している学者もいるが、本当にそうだったのだろうか。日本は経済の高度成長期に続き、80年代後半のバブル経済を経験してきた。このバブル経済が弾けた後の十数年間、雇用はバブル期の「青田買い」をするほどの求人がなくなったとは言え、勤めようとすれば、職があったはずである。なにしろ、不景気の中でも、日本人と同じ賃金で働いている外国人が大量に存在していたではないか。

職があっても就職できなかったもっとも大きな理由は、多くの若者が職場を探す際、自分は何ができるかというより自分の「やりたい」、「興味のある」部分を強調しすぎて、趣味と生存の手段である勤めを混同して一緒に考えていたからではないだろうか。仕事をし、会社と社会に貢献し、自分も満足できるのならば、それ以上良いことはない。しかし、それは理想に近いもので、ほとんどの場合、仕事をすることは生存の糧を稼ぐための活動で、忍耐と我慢が必要で、趣味を楽しむこととはしょせん違うのである。また、「やりたい」、「興味のある」仕事ははっきり分かっているならば、それだけ明確な目標を持って就職活動をしている人にはチャンスがあると思うが、しかし、「何がやりたい」、「何に興味がある」かもはっきりしないまま、就職の機会を断ったり、あるいは、やりがいを感じないことを理由に仕事を辞めたりしている人のほうが絶対多数を占めている。

日本国憲法では、勤労の義務を明記している。日本では勤労意欲を持っていれば、働きさえすれば平均水準が維持できると、ある中国東北部から引き揚げてきた日本人二世の人が語っている。2000年頃日本に引き揚げてきた40代の夫婦と高校生の息子の一家三人は、言葉が通じないため、夫婦ともに自動車部品工場パートとして働きはじめ、のちにその真面目さと勤勉さが認められ正社員として迎えられたのである。個人収入は同世代の日本人の平均に届かないが、夫婦で働いたので、日本の一世帯当たりの年間平均所得579万円を上回っている。これは特殊な例ではなく、引き揚げ者のほとんどがこのように日本での生活を軌道に乗せたわけである。勤労態度を公平に評価する日本は多くの就労チャンスを提供している。惜しいことに、多くの若者が「やりがい」と「興味」にばかりこだわり、一部の職種にしか目を向けず、これらのチャンスを見逃してしまったのである。就労意欲を「興味」から勤労義務の履行に切り替えることができれば、貧困に陥ることは避けられると思う。

又、派遣会社の存在と大量のアルバイトのチャンスは若者が定職につきにくい一因になっていると思う。日本はサービス業が発達しているため、臨時求人が多く、短期アルバイトができる職場が大量に存在している。派遣会社に登録しておけば、空いている日に仕事を紹介してもらい、その日の稼ぎができるのである。このようにして、若者たちは旅行

日本の『蟹工船』ブームと中国の国語教科書からの『包身工』の削除について

や趣味に使う資金を簡単に稼げるし、働きたい時に必要な分だけ働いて、青春を思う存分に謳歌することができるのである。

年齢階級 (歳)	1月あたり賃金 (千円)				雇用形態間格差 (正社員・非正社員 =%)	
	男		女		男	女
	正社員・正職員	正社員・正職員以外	正社員・正職員	正社員・正職員以外		
18-19	169.1	153.5	156.6	142.6	91	91
20-24	201.2	173.5	190.9	161.5	86	85
25-29	243	201.9	217.1	183.1	83	84
30-34	291.1	224	241.6	187.4	77	78

(出所) 厚生労働省「賃金構造基本調査」

図1 若年層の正社員・非正社員・所得格差 (2005年)

厚生労働省の「賃金構造基本調査」によると、18～19歳の非正社員の所得は男女とも同年代正社員所得の91%であって、一ヶ月の賃金格差は、非正社員は正社員より男性が1万5千円、女性が1万4千円少ない。20～24歳の非正社員の所得は、男性は正社員所得の86%で、女性は正社員の85%である。一ヶ月の賃金格差は、非正社員は正社員より男性が2万7千円、女性が2万9千円少ない。社会保険控除後の正社員の手取りは非正社員と大差がない。わずかな賃金格差の代わりに、非正社員は束縛が少なく、正社員より多くの自由をエンジョイしている。

非正社員と正社員の間所得格差は25歳以後顕著になってくる。非正社員は年功序列の賃金制度の恩恵が受けられないため、年齢の増加とともに正社員との格差が拡大し、ゆくゆくはワーキングプアになってしまう。気楽に始めたフリーター人生は貧困の落とし穴に落ちてしまうのである。若者はこういう結果が待ち受けているとは知らないわけでもないが、誘惑の多い世の中、電話一本で派遣してもらい、その日の稼ぎで欲を満たせる現実からなかなか抜け出せないのである。

個人的社会的要因のほかに、親の過保護もフリーターを助長している。蟹工の時代は家に経済的な余裕がなく、働ける年齢になった子供が働きに出かける。蟹工船にも十四、五歳の子供がたくさん働いていた。今の20～40歳のフリーターはその親たちが一億総中流の時代を創った世代で、生活に余裕ができたためか、就職しない子供の面倒を見続け、同居を容認している。親と同居しているフリーターは家賃、食費、光熱水道などの諸費用を負担する必要がなく、たとえワーキングプアになったとしても暮らしていけないという心配

がない。親と同居している限り、親に援助してもらえる限り、節約や貯蓄する必要もなく、収入を全部趣味に使える。こういう甘い生活に慣れていれば、生活を営む力が育たず、就職に対する差し迫った緊張感も生まれてこない。

したがって、フリーター、ワーキングプアの増加は雇用側に問題があるものの、本人たちの認識の甘さと努力の足りなさが主な原因ではないかと思わないわけではない。

『蟹工船』のなかで「小林は帝国主義国家の『辺境』における植民地的な搾取、未組織労働者の団結、国家と財閥と軍隊との関係、天皇制の問題を示そうとした。……未組織の労働者を国家と資本家に対する一つの生きた集団として描こうとした。」^②今の日本はもう成熟した資本主義国家になり、社会状況が75年前とまったく違っている。なのに、『蟹工船』ブームが起こっている。そのわけは何であろう。それはワーキングプアが自分たちの貧困状況を社会に知ってもらい、待遇の改善を求める訴えと理解してよいであろう。それに答えるように、政府は日雇いの廃止や派遣制度の見直しに着手し始め、フリーターやネット難民の就労支援や職業訓練に必要な資金を融資する決定を出している。だが、フリーター自らの就労意識や生活態度の改善が行われなければ、貧困から抜け出すことはやはり困難である。

三、『包身工』削除の反響

中国では人民教育出版社が編纂した教材はもっとも権威的で、全国範囲で使用されていた。1949年以後の中国は政治的社会的変化が激しく、イデオロギー教育の一翼を担っていた国語教材が政治的影響を受けずに編集されることは不可能だった。しかし、幾度の変動があっても、30年代の左翼作家である魯迅、夏衍の作品は不動の地位にあった。中国人は彼らの作品を読んで育ったと言っても過言ではない。それだけに、『包身工』が高校の国語教科書から削除された際の反響も大きかった。

削除された革命的な模範文はほかにもあったが、『包身工』ほどの関心は寄せられなかった。それは「包身工」がすでに一種の雇用形態として、現在でも遍在していて、国民が彼らに高い関心を持っているからである。

2007年6月摘発された山西省の「黒奴」(非合法的な会社で奴隷のように働かされる労働者)事件は社会に大きなショックを与えた。黒奴のほとんどは河南省で「人販子」(人身売買する人)に誘拐、拉致された十六、七歳の少年である。人販子は拉致してきた少年を、河南省や山西省の山奥にある闇の煉瓦工場に1人400円で売りとばした。少年たちは毎日5:00～24:00まで働き、喉が渴いたら生水を飲み、一日三度の食事は冷たい饅頭(具のない蒸しパン)六つとキャベツサラダ三皿だけであった。古い綿を敷いた地面に寝て、水を節約す

日本の『蟹工船』ブームと中国の国語教科書からの『包身工』の削除について

るという理由で、三ヶ月も風呂に入らせてもらえず、虱がわいていた。履くもの、着るものも買い与えられなく、多くは裸足、はだかですべて働いていた。逃亡を図ろうとしても見張りに猛犬がいて、不可能であった。

山西省の山奥に闇の煉瓦工場がたくさんあり、どの工場でもこのような少年が何十人何百人と働いていて、中には僅か八歳の子もいた。闇工場のなかには村の共産党支部長（村長にあたる）の息子が経営しているものもあり、彼は直接に経営や生産には携わらず、仕事を人に請負わせていた。その請負人が少年たちを使って生産した煉瓦1万個を380円で党支部長の息子に卸し、党支部長の息子がそれを1万個2000－3000元の値段で市場に売り出すのである。

事件は行方不明になった子供たちの親1000人ぐらいが山西省の山奥を探し回り、状況をネットに流し、河南省のテレビ局が制作したこの放送によって世に知らされた。しかし、現地の党機関、行政、公安は域内から毎日大量の煉瓦が送り出されていくのを見て、闇煉瓦工場の存在を知っていたはずである。それなのに、失踪した子供たちの親が動き出すまで摘発することなく、この闇煉瓦工場が生産し続けることを黙認し続けてきた。そのことから、現地の政府機関が如何に腐敗しきっていたかを思わざるを得ない。

夏衍の『包身工』は大洋20円で3年契約を結んで親元から連れられていったが、人販子は、十代の少年が労働力にもなるし、マインドコントロールしやすいと見て、彼らを誘拐・拉致した。工場経営者はそれを知りながら、一文も払わずに彼らを酷使し、莫大な利益を得たわけである。「人販子」や工場経営者は30年代の帯工よりはるかに残酷である。

山西省の「黒奴」事件は決して偶発的なことではない。山西省に隣接する河北省輝県にある20社の煉瓦工場でも未成年者だけではなく、知的障害者もたくさん使っているとの目撃証言も新聞に載っている^③。

広州市康楽村の闇工場でも数百名の未成年者が昼夜を問わず働いている。給料は年に一回しかもらえず、食事をろくに口にすることもできず、常にひもじい思いをしていて、病気になる子もいる。このような工場は鉄の柵で幾重にも囲まれ、よその人は近づくことができない^④。

2004年4月『新快報』に広州市白雲区にある、台湾人の経営している木製品工場から助けを求める手紙が届いた。そこの労働者は粉塵が充満した工場で一日16時間も働き、一月200時間の残業を強要され、給料はわずか800元である。蒸風呂のような暑い宿舎に寝泊りし、一日5時間も睡眠が取れば良いほうで、長期的な睡眠不足と重労働で、事故が頻発している。中では7ヶ月で5キロ近く痩せた人もいた^⑤。この事実は人々に夏衍の『包身工』のなかに出てきた「葦柴棒^{ルーチャイバン}」、および、湿気と埃の紡績工場を連想させた。

このような事例は全国各地にあり、枚挙にいとまがない。人々はこのように虐使されて

いる労働者のことを「現代の包身工」と呼び、そして、『包身工』の削除に対する反響のほとんどはそれを惜しむというより、むしろ「現代の包身工」を30年代半植民地国家だった中国の包身工と比較し、現政府の無作為と拝金主義横行の社会を揶揄しているのである。

そのほかに、『包身工』が国語教科書に残る価値についても検討してみたい。『包身工』は新聞報道、ルポルタージュのジャンルに入れられ、高校一年生用の教材に使用されてきた。ルポルタージュは報告文学とも言い、事件や社会問題などを題材に綿密な取材を通して事実を作為的でなく客観的に叙述する文学である。

夏衍が包身工の生活実態を調査するために、多くの時間と苦勞を費やした。だから、文学的手法で描いた包身工たちの劣悪な生存状況が手にとるように伝わってくる。しかし、包身工の収入に関してはその低さばかり強調されていたが、当時の社会状況から遊離している面もあると経済学者の邹嘯鳴氏は指摘している。氏は『包身工』の中に出ていた数字を用いて次のように分析した。

包身工の賃金は一体どれくらい低かったのか、『包身工』の中では葦柴棒^{ルーチャイバン}を例に記述している。彼女の最初の給料は一日（12時間労働）で大洋1～1.5角で、仕事の内容は技術のいらない床掃除、原綿の包装解きと運搬などである。数週間後、カード、スライバー、粗紡に移される。一年目の収入は一日平均大洋3.2角で、二年目は一日平均3.8角である。一ヶ月当たり大洋10個の収入がある。大洋10個はどれだけの価値があったかは、1933年葉聖陶氏が発表した『多取了三五闕』のなかでは「食糧が豊作だった地域では米1担大洋5個、雑穀1担大洋3個」と書いてある。すなわち、包身工一か月の収入は豊作地域で米2担（1担＝約50キログラム）が買える。一年の収入で米24担（1200キログラム）が買えるという計算になる。十四、五歳の女の子にとって決して低い収入とは言えない。ただし、その金は帯工に持っていかれ、彼女たちのものにならなかった。帯工はすでに大洋20個で彼らを三年間借り切り、金を稼ぐ道具にしたのである。大洋20個はちょうど葦柴棒^{ルーチャイバン}の二か月の収入であって、それだけで彼女を三年間借り切ることができたということは、当時の工業と農業の格差が大きく、とりわけ農民の収入の低いことを映し出している⁶。

夏衍は、帯工が所有している包身工の数で、帯工の財産の数を示している。30～50人の包身工を所有する帯工もいれば、150人以上を所有する帯工もいる。帯工は包身工が稼いでくれた金で高利貸しをしたり、土地を買ったり、家屋を建てたりするだけではなく、茶楼や風呂屋、床屋のような商売を営することも、と帯工の包身工から搾取した金額の多さを紹介している。

帯工と包身工のこうした搾取と被搾取の関係を暴露するための『包身工』だと思うが、しかし、夏衍が筆鋒を一転して、「特恵の保護のもとで廉価な労働力の滋養を受けて、中国にある日系企業が飛躍的に拡大した。福臨路を例にして、光緒28年（1902年）三井が大

日本の『蟹工船』ブームと中国の国語教科書からの『包身工』の削除について

純紗廠を買収して最初の工場を開いたとき、スピンドルの数は2万弱だったが、30年後には紡績工場6軒、紡織工場5軒、スピンドル25万個、織機3千台、労働者8千人、資本金千二百萬元の規模に達した。哲学者エマソン (Ralph Waldo Emerson) の友人のソロー (Henry David Thoreau 1817-1862) がかつてある本において次のようなことを書いたことがある。アメリカ鉄道のすべての枕木の下にアイルランド人の死骸が横たわっている。そこで、私は日本工場のすべてのスピンドルに中国奴隷の亡霊がついていると連想する」と罪悪の根源は日系企業にあるように結論づけた。まるで日系企業は包身工だけによって支えられていたような印象を与え、文章のなかに現れたチャイナドレスを纏い、パーマをかけた自由労働者の存在を否定するような書き方は自己矛盾していると思われる。

大量の廉価な労働力がなければ日系紡績会社はそこまで大きな発展を遂げられないことは争えない事実である。しかし、約8000文字のルポの中で、日系企業についての記述は上述の226文字しかない。それだけで、帯工の残酷無道な搾取の罪を日系紡績会社にすり替える結論のつけ方は唐突で、文章全体との整合性がなく、説得力が欠けていると言わざるを得ない。ゆえに、『包身工』が教科書として適切な文章だとはとうてい考えにくく、削除されても仕方ないと思う。そして、その削除は文学の大家の作品でも客観的に読み、公正に批評した結果であり、教材編集における自由度と開放度が高くなったと思う。

四、余波

2008年1月9日『毎日新聞』に作家の高橋源一郎氏と雨宮処凛氏の格差社会をめぐる対談が掲載された後、『蟹工船』は例年にない売れ行きを見せた。両氏が対談の中で『蟹工船』に触れたことをきっかけにブームが起こったと考えられる。教育普及率が高く、情報手段も発達している日本では、文化系ブームが起こりやすく、冷めるのも早い。しかし、『蟹工船』ブームは、派遣会社グッドウィルの多重派遣問題の発覚と時期的に重なり、フリーターの置かれた労働条件の深刻さが注目を集めた。

日本共産党の志位委員長が2008年6月28日毎日放送の『蟹工船』ブームを語る番組のなかで、「新自由主義と市場原理主義が、若者の未来と両立しなくなってきた。むきだしの形での野蛮な搾取が横行するようになってきた中での『蟹工船』への共鳴ですから、今の社会をもとから変えようという流れにつながってくると思います」と指摘した。『蟹工船』の唱えた連帯の大切さに触発されたのだろうか、格差問題を真剣に取り組んでいる共産党の姿勢に感銘を受けたのだろうか、昨年9月以降の10ヵ月間で、共産党に新規に入党した者が約1万人もあった^⑦。新規入党者の年齢層、社会層こそ分らないが、少なくとも、貧困、格差といった問題に連帯して立ち向かう意識が高まってきたと見て良かろう。

フリーターがフリーターとなった理由はいろいろあるが、低収入を我慢しても、組織に束縛されず、自由気ままに生きる生き方を選んだ人は少なくない。年齢と生活経験の増加とともに当初の考えを改めて真剣にチャレンジしようと思う人も少なくない。雇用状況の好転、政府の取り組みなど、社会は今そういう人たちにチャンスを与えようとしている。ただし、社会は豊かであるほど、福祉政策が整備されているほど、フリーターが生まれやすいのである。たとえ一時的に減少したとしても、また新たなフリーターが出てくるので、長期的に対処していかなければならない問題である。そして、家庭教育のなかで、子供の小さいうちに労働の大切さを教え込むことも大事である。

いっぽう、中国の国語教科書は学年を問わず、その内容は共産党指導下の新中国を謳歌し、植民地支配や国民党支配下の苦難を暴露する傾向があった。『包身工』は帝国主義と買弁勢力が結託して中国の労働者を搾取、略奪する犯罪行為を暴露した文章として最適だったと思われる。しかし、70余年も経った今、中国の社会制度は変わったものの、社会の陰の部分の構造は少しも変わっていない、と『包身工』を読んで分かったのである。

まず、都市と農村の生活格差、工業と農業の格差に改善が見られていないだけでなく、新中国が制定した都市と農村を隔離する戸籍政策は農民を土地に固定させ、都市で職につかなければ、「盲流」と呼ばれ非合法的な存在とされた。たとえ職についても「農民工」であって、都市労働者と待遇が違う。都市労働者と農村からの出稼ぎ労働者の間にある隔たりは夏衍の書いた、「包身工」と「外の工人」の間にあった壁と質的に変わっていない。ただし、夏衍が『包身工』を書いた時代、農民が都市と農村の間で自由に行き来ができていて、今のような戸籍上の差別はなかった。今では都市に生まれた人間は当然の都会人であって、農村出身者に対する優越感が随所に表れ、「農民工」の置かれた劣悪な生活状況に対する無関心な態度が昔よりさらにひどくなっている。

夏衍は『『包身工』余話』のなかで当時の法律を紹介した。刑法第26章第296条には「人を奴隷ないし奴隷のような不自由な境遇に居させる者を1年以上7年以下の刑を処す」、第32章第344条には「人の急に乗じて金品を貸与して、元本に相当しない利益を取得する者を五年以下の刑を処す。または、三千元以下の罰金を取る」と書いてあり、帯工の包身工に対するやり方のすべては違法だと指摘した。しかし、包身工の生活は帯工の管理下であり、毎日工場と宿舎の間を往復し、その存在は社会に知られていないとされていた。しかも未成年労働者を重労働させるのも違法行為だったが、警察は工場の利益を守り、見て見ぬふりをしていた。

今はどうであろう。農民工が農民工であるがため、労働組合にも社会保険にも守ってもらえない。彼らは個々バラバラに農村から出稼ぎに出てきて、同郷同士の連帯があっても農民工としての組織はない。ゆえに、政府が彼らの実態を把握していないのではないかと

日本の『蟹工船』ブームと中国の国語教科書からの『包身工』の削除について

思われる。劣悪な環境に置かれていても、法定の残業時間を超過して働かされても、法律に訴える人が少ない。近年マスコミの力を知り、新聞、放送などに電話して助けを求める件数が増えた。農民工の現状改善にマスコミは法律以上の力を発揮している。というのは、法律は個別案件を解決できても、農民工全体を助けることができない。マスコミは社会の同情と憤慨を煽りたて、政府を動かすことができるからである。しかし、社会の農民工に対する関心が高まったと言っても、国土が広く、現代の帯工はより陰湿的になっているから、知られないところで現代の包身工が大量に存在し酷使されていると推測できる。

また、山西省の閻煉瓦工場のように共産党幹部が経営に関与しているだけに、労働者を非合法的な手段で騙してきても非人道的に扱っていても、それに立ち向かう者が現れてこない。党幹部と政府の腐敗が多くの農民工を現代包身工に落とした一因になっている。

高校の教師用教材に『包身工』の意義について、「『包身工』は夏衍が長期にわたって実地調査をし、信用できる資料を大量に獲得したうえで1935年に完成したものである。彼は確固たる事実と正確なデータに鋭い分析と評論を加え、最も重い仕事をしながら、地位が最も低く、待遇が最も悪い、奴隷のように働く女の子たちのことを世に暴露し、そして、帝国主義と買弁勢力が中国の労働者から残酷に搾取し、略奪する犯罪行為を非難した。と同時に、包身工制度は半封建半植民地社会を温床に、国民党反動政府の『特惠』の保護を受け、農村経済の衰微とともに生まれた癌である」と書いてある^⑧。

上記の記述から『包身工』の勉強目的は帝国主義と買弁勢力の非道無道と国民党政府の無能を知ることである。ところで、「現代の包身工」が明るみに出てから、その境遇を見るたびに、人々は思わず30年代の包身工と比較してしまうのである。そのため『包身工』が共産党と社会主義の新中国を謳歌する教科書にふさわしい内容でなくなり、削除されてしまったのではないかと人々が推測している。

削除した理由はともかく、「包身工」という言葉はすでに固有名詞となり、ずっと比喩的に使われていくだろう。

注：

- ①、大正14（1925）年2月、上海に起った「在華紡」のストライキと、5月15日、内外綿第七工場で起きた紡績労働者顧正紅殺害事件を機に上海から全国に拡大した「五・三〇運動」となった。
- ②、『蟹工船・党生活者』解説・蔵原惟人
- ③、『中国教科書删包身工 引一片质疑声』，新華社の報道，大纪元 澳洲中文网 2008，2，2
- ④、『中国教科書删包身工 引一片质疑声』，新華社の報道，大纪元 澳洲中文网 2008，2，2
- ⑤、『加班时间超法定极限6倍 当代“包身工”惊现广州』新快报 2004，4，30

- ⑥, 「我有点理解为什么要把『包身工』从中学课本里删除了」铅笔经济研究社, 邹啸鸣 2008, 1, 22
- ⑦, 『毎日新聞』8月31日19時53分配信
- ⑧, 教师用书电子版

参考文献：

- 『ワーキングプア』, 門倉貴史, 宝島社, 2006年11月
- 『格差社会』, 橋木俊詔, 岩波新書, 2006年9月
- 『蟹工船・党生活者』, 小林多喜二, 新潮社, 平成20年 百刷
- 『包身工』, 夏衍, 人民文学出版社 1978年11月